

英語学習行動の日韓比較

— 女子大学生調査結果の分析から —¹⁾

渡邊あす香 (℥ ジースタイラス、奈良女子大学文学部卒業)

保田 卓 (奈良女子大学研究院人文科学系)

1. 問題と目的

近年、グローバル化の進展に伴い、日本ではますます英語の重要性が高まっていると言われている。文部科学省は2002年に『英語が使える日本人』育成のための戦略構想』を打ち出し、2011年の春からは、全国にある全ての公立小学校の5・6年生を対象に外国語活動が始まった。また昇進に一定のTOEICスコアを課す企業の増加や、「社内英語公用語化」する企業の出現、英会話スクールの流行や、書店の外国語学習コーナーにひしめく英語学習関連の書籍等、英語の盛行はとどまるところを知らない。

同様の状況は韓国にもある。長谷川・吉田(2011)は、日韓の学生の、外国語としての英語学習(EFL)という学習環境を類似点の一つに挙げている。また佐藤(2009)は、①大学入試のための受験英語の存在、②TOEICの受験者数の多さを日韓の英語教育の共通項として指摘しているが、同時にその相違点も挙げている。韓国では大学入試でのリスニングテストの導入や小学校英語教育の必修化が日本よりも10年以上先行している。1982年から実質的にすべての小学校で英語教育が行われ始めた韓国では、1997年には小学校3年生から英語が必修科目として正式導入された。

しかし、このような公教育での英語教育が進んでいるだけではない。英会話スクールや「英語幼稚園」という外国人教師が英語で授業を行う幼稚園に、その高額な学費にも関わらず就学前の子どもを通わせる親も少なくないのが現状だ。また1990年代末から早期留学ブームが始まり、妻と子どもは海外に行き、韓国に1人残って留学中の妻子の生活費や学費を支える「キログニアッパ(一人暮らしの父親)」現象が生じ、一時期、韓国内では社会問題となった。

さらに、後に子どもが現地での英語学習や就職に有利になるよう、母親が出産前からアメリカやカナダを訪れて二重国籍を取得するという事態まで起こっていると言われている。このように、韓国の英語教育は公・私の両面にわたって非常に盛んである。

また、韓国では大学入試のみならず、就職時にも高い英語力が要求される。大学生に必要とされるTOEICの平均スコアは理系で800点以上、文系で900点以上とも言われており、特に最近では、英語で面接が行われる企業も出てきているという。そして、就職時だけにとどまらず、入社後の昇進試験などでも英語能力は常に評価の対象となるのである。このように、韓国社会では常に高い英語力が必要とされている。そしてそれに伴い、人々の英語に対する認識や英語学習意欲も、日本のそれを上回る勢いなのだ。

しかしながら、日韓の英語教育・学習を学術的に比較した先行研究は、小学校英語教育や英語教科書の比較検討、あるいは教授法に関するものが大半である。英語関連の事象に現れる人々の意識や社会構造の違いにまで言及している数少ない研究として、佐藤(2009)によれば、韓国人学生は日本人学生と比較すると、英語学習に対して強い動機づけを持ち、より多くの学習行動を

起こしている。また長谷川・吉田（2011）も、韓国人学生の英語学習動機の方が全般的に高く、特に留学や仕事に関する動機づけに顕著な違いがあると指摘する。しかし、いずれも動機づけの強さや動機の分類を検討するにとどまっている。唯一、日韓大学生の英語に対する認識の比較から、両国の国民性や社会の特徴の違いにまで言及している吉川（2003）によれば、日韓で最も差が大きかった項目は「英語学習の理由」であり、日本人学生は主として英米文化の吸収を目的としているのに対し、韓国人学生は就職等の実利目的での英語学習を意識している傾向にある。さらに、英語からの外来語に対する反応にも大きな違いが存在しており、日本の大学生の約 65% が外来語を容認しているのに対し、韓国では 15% 強にとどまっている。しかし統計的検定がなされていないため、結果がサンプルからどの程度一般化できるかが不明であり、また分析の際に使用された量的調査の設問も少ないだけでなく、出自等の家庭環境や個人の価値観・人生観等との因果関連モデルまで検討されておらず、英語学習に関する分析結果がいかなる要因によって生じているかが必ずしも明らかではない。

そこで本研究では、韓国人学生の英語・英米文化等に対する考え方、英語学習動機等に焦点をあて、英語に対する意識や意欲を数値化すると同時に、最終的な英語学習行動に影響を与えている要因を、日本との比較を通して検討していく。

2. 方法

日本と韓国の女子大学生を対象に質問紙調査を行った。詳細は下記の通りである。

（1）**調査対象と実施時期** 日本の調査は 2013 年 7 月に J 女子大学の学生を対象に行った。授業時に調査票を配布・回収し、有効回答数は 131 であった。韓国では 2013 年 9 月に K 女子大学の学生を対象に大学のラウンジ、授業前の教室等で調査票を配布・回収し、有効回答数は 160 であった。両大学とも国内では相対的に入学難度が高く、また学生の出身地は国内の全域に及んでいる。大学生を調査対象とした理由は、英語の学習動機として「受験のため」というものが無くなり、英語に対する考え方が多様化していると推測されること、また社会に出る直前の段階である大学生の時期に、どのような英語認識を持っているかを調べることによって、英語と社会との関連を鮮明に見ることが出来ることである。また女子を対象としたのは、実査の便宜に加え、英語に対する姿勢と女性のキャリア・人生観などとの関連を検討できるため、また男性の方がメリトクラシーを要求される傾向にある中で、女性に英語メリトクラシーがどこまで浸透しているかを調べるためである。

（2）**質問紙作成と実査・データ分析** 質問紙を作成するにあたり、大阪市立大学教育研究センター・大阪府立大学総合教育研究機構（2007）、吉川（2003）等を参考にした。実査にあたっては、無記名で行い、回答内容は統計的に処理され、個人のプライバシーが侵害されるおそれがないこと、調査結果を本研究以外の目的では使用しないことを回答者に事前に伝えた。分析には統計ソフト SPSS を使用した。

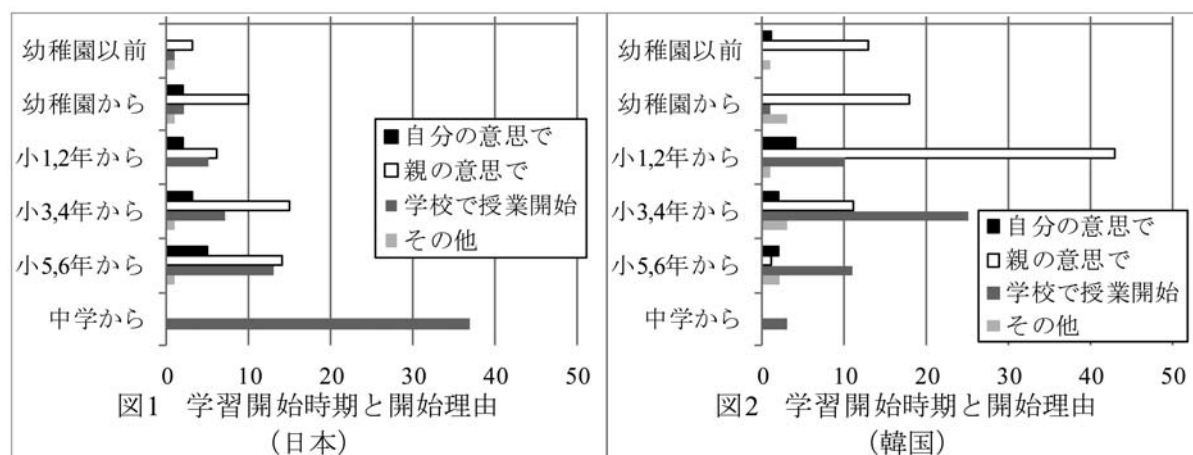
3. 結果

（1）英語学習関連変数の単純集計の日韓比較

英語学習開始時期 英語学習の開始時期と開始理由（誰の意思で開始したか）を図 1・図 2 に示す。今回の調査は、科目等履修生を除くと、1988-94 年生まれが対象となっていること、さらに日本における公立小学校における外国語活動は 2011 年の春から 5・6 年生を対象に始まったこ

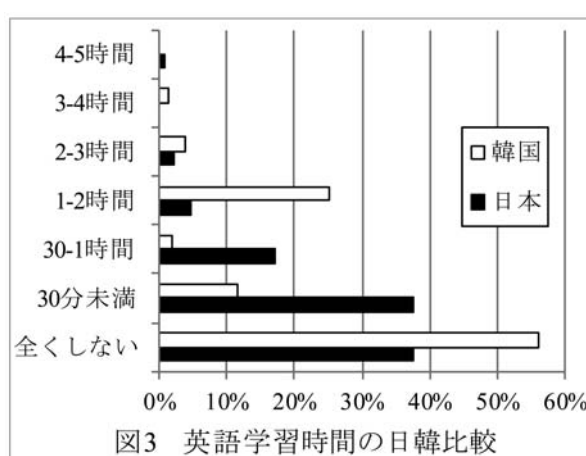
とから、日本の調査対象者は基本的に公教育では中学校から英語を学習していることになる。一方、韓国の義務教育における英語教育は、1997年から小学校3・4年生を対象に開始されている。調査対象の学生が、1989-95年生まれということを考慮すると、今回調査した韓国人学生は小学校3・4年生から、学校で英語教育を受けていることになる。

ここで注目したいのは、「親」による子の英語教育への影響である。英語学習を幼稚園入学前から行っている人のうち、親の意思で始めた人の比率は、日本60.0%・韓国86.7%、幼稚園から始めた人では日本66.7%・韓国81.8%、小学校1・2年から始めた人では、日本46.2%・韓国69.0%であり、韓国人学生の方が、公教育での英語学習開始を待たずに、より早い時期から親主導による英語の私教育を受けていることが分かる。



学校以外での英語学習年数 学校以外での合計英語学習年数は、日本サンプルでは平均5.86年 (SD=4.15)、韓国サンプルでは9.06年 (SD=4.43) であった。韓国人学生は日本人学生に比べ、学校以外での英語学習年数が3年以上、上回っている。なお今回の調査では、前項で確認した通り、日本では1988-94年生まれ (科目等履修生を除く)、韓国では1989-95年生まれが対象となっている。したがって調査対象となった韓国人学生の方が、年齢が高いために学校以外での合計英語学習年数が長くなっている、という可能性は排除される。

英語学習時間 大学での授業等を除く調査時点での英語学習時間を図3に示す。図3から日本人学生は、半数以上が毎日1時間以内の英語学習時間を確保していることが分かる。一方、韓国人学生は「全くしない」が56.1%と半数を超え、日本と比較すると20%弱上回っている。しかし、1時間以上英語学習をする人の割合が3割と、学習者は日本に比べて長い時間学習する人が多い傾向にある²⁾。



英語学習動機 あらかじめ、前提として以下のことを確認しておく。「英語学習動機」は、①学校以外 (語学学校、塾、自宅等) で「自主的に」英語を学習している学生、②学校の授業で英語学習をしている学生 (必修のために受講するという受動的な学習も含む)、③英語学習を一切していない学生、が含まれている。そのため、日韓ともに全てが字義通りの「動機」 (=主体的に選択した行動の理由) ではないことに留意したい。

英語学習動機や目的を問うた質問では、各小問に対して、「非常に当てはまる」=5、「まあま

あ当てはまる」=4、「どちらとも言えない」=3、「あまり当てはまらない」=2、「全く当てはまらない」=1の5段階評価で回答を求めた。日韓それぞれについて各小問の平均値と標準偏差を表1に示す。

有意差があった全ての項目で、韓国サンプルの平均値の方が有意に高いことが示された。最も差が顕著に現れた項目は「学位取得のための留学のため」であり、次いで「語学留学のため」「専門分野の研究等で必要なため」「将来英語を教えたいため」「将来英語圏の国に移住したいため」で韓>日の開きが大きい。この結果から、韓国人学生は、日本人学生に比べ、将来を見越した英語学習に強い動機を示していることが分かる。

また韓国の場合、全ての項目で5段階評価の中間の値である3を超えているのに対し（平均値の平均は3.60）、日本では3以上は7項目にとどまっており（同じく2.76）、この絶対値の高さからも韓国の大学生の英語学習動機の強さをうかがい知ることが出来る。これらは、佐藤（2009）や長谷川・吉田（2011）の研究を裏付ける結果である。

英語関連意見 英語・英米文化等に対する考え方を問う設問では、各小問に対して、「強く同意する」=5、「まあ同意する」=4、「どちらとも言えない」=3、「あまり同意しない」=2、「全く同意しない」=1の5段階評価で回答を求めた。日韓それぞれについて各小問の平均値と標準偏差を表2に示す³⁾。

表1 英語学習動機の日韓比較

| | 平均評定値 (SD) | |
|----------------------|-------------|-------------|
| | 日本 | 韓国 |
| 学位取得のための留学のため | 2.19 (1.06) | 3.95 (1.01) |
| 語学留学のため | 2.25 (1.24) | 3.77 (1.15) |
| 専門分野の研究等で必要なため | 2.85 (1.31) | 3.91 (1.01) |
| 将来英語を教えたいため | 1.94 (1.25) | 2.96 (1.54) |
| 将来仕事で使いたいため | 3.34 (1.26) | 3.83 (1.17) |
| 外資系企業に勤めたいため | 2.05 (1.08) | 3.55 (1.20) |
| 将来海外赴任したいため | 2.25 (1.20) | 3.79 (1.13) |
| 将来英語圏の国に移住したいため | 2.00 (1.17) | 3.04 (1.40) |
| 洋書等を読みたいため | 3.11 (1.33) | 3.59 (1.03) |
| 英字新聞・雑誌等を読みたいため | 3.05 (1.27) | 3.43 (1.02) |
| 洋画等を字幕なしで見たいから | 3.37 (1.23) | 3.65 (1.02) |
| 世界中の人々と意思疎通できるため | 4.05 (1.00) | 4.29 (0.77) |
| 世界中の情報を素早く取り入れるため | 3.14 (1.24) | 3.70 (1.08) |
| アメリカの文化や社会情勢に興味があるから | 2.40 (1.11) | 3.14 (1.11) |
| イギリスの文化や社会情勢に興味があるから | 2.46 (1.05) | 3.21 (1.11) |
| 日本（韓国）のことを世界に知らしめるため | 2.53 (1.21) | 3.28 (1.12) |
| 就職に有利だから | 3.93 (1.03) | 4.16 (0.97) |

※平均値の差は全て5%水準で有意

表2 英語関連意見の日韓比較

| | 平均評定値 (SD) | |
|--|-------------|-------------|
| | 日本 | 韓国 |
| 現在、外国語学習として英語が最も多くの人に学習されているが、これはいいことだ | 3.84 (0.86) | 3.62 (0.92) |
| 英語を第二公用語にしたほうがいい | 2.75 (1.19) | 2.47 (1.20) |
| 英語からの外来語が増えているが、好ましくない | 2.57 (0.97) | 3.49 (0.97) |
| アメリカ合衆国の文化が世界中に広まっているが、いいことだ | 2.92 (0.79) | 2.53 (0.86) |
| アメリカ合衆国の一般の人たちに対して、好感を持っている | 3.38 (0.80) | 2.99 (0.80) |
| アメリカ合衆国の文化に対して、好感を持っている | 3.27 (0.82) | 3.04 (0.83) |
| イギリスの一般の人たちに対して、好感を持っている | 3.62 (0.72) | 3.18 (0.81) |
| イギリスの文化に対して、好感を持っている | 3.61 (0.74) | 3.16 (0.83) |
| 英語は、ネイティブスピーカーではない[同国]人以外から学ぶのがいい* | 2.62 (0.83) | 2.21 (0.96) |
| [同国]人は、[同国]的な英語でかまわない* | 2.38 (1.05) | 3.52 (1.10) |
| 英語ができれば、社会的な成功を収めることが出来ると思う | 3.21 (1.08) | 3.62 (0.98) |
| 英語はこれから先、一生勉強し続けなければならないと感じる | 3.92 (0.95) | 3.67 (0.94) |
| 英語を勉強するのはとても楽しい | 3.28 (1.08) | 2.92 (1.16) |
| 英語を勉強することは、入学試験や就職活動に関係なくても大切だ | 4.22 (0.71) | 3.41 (0.90) |
| 英語を上達させて、英語を母語とする人と友達になりたい | 3.80 (1.10) | 2.79 (1.21) |

*[同国]は、日本調査では「日本」、韓国調査では「韓国」とした。

※平均値の差は全て5%水準で有意

結果を通覧すると、日本人学生は英語や英米文化に対し、全般的に好感を持ち、肯定的に捉えていることが分かる。これに対し、韓国人学生の平均値が有意に高かった3項目のうちの2項目は、「英語からの外来語が増えているが、好ましくない」、「韓国人は、韓国的な英語でかまわな

い」で、それぞれ0.9ポイント、1.1ポイントも日本を上回っている。これは、吉川（2003）が指摘している、韓国における一種の「自国文化防衛気風」が感じられる結果であろう。

以上のことから、日本人学生は英語や英米社会に対する抵抗が少ないのに対し、韓国人学生は抵抗を感じている、ということが推測される。

また、「英語ができれば、社会的な成功を収めることが出来ると思う」では、0.4ポイントではあるが、韓国が日本を上回っている。ここから、韓国では英語が社会的な成功と強く結び付いていると人々が認識していることが分かる。松本（2007）は、韓国では「社会的に安定した地位にある者は高い英語能力を備えているという認識が浸透し、英語学習を過熱化させているものと思われる」（p.37）と述べているが、今回の結果はこれを裏付けるものといえよう。

（２）英語学習行動の規定要因の日韓比較

因果モデル 次に、個人の英語学習行動に影響を及ぼす要因を明らかにし、日韓間でその因果関係に違いが見られるかを検証するため、パス解析を行う。そこで図4のような因果モデルを構成した。「出自」は父学歴、父職業、母学歴、母職業、実家にある書籍数、小学生時の保護者同伴での美術・博物館訪問の6項目を投入した。なお、父母

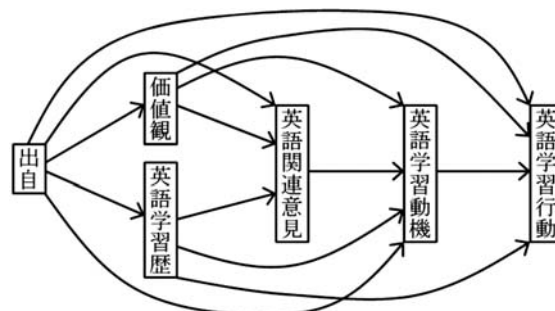


図4 英語学習行動の規定要因の因果モデル

の学歴は日韓ともに「中学校、高校、専門学校、短大卒業」を0、「大学、大学院卒業」を1としてダミー変数を作成し、投入した。父母の職業も同様に、非専門・管理職（農林水産業、非管理職サラリーマン、事務職以外のサラリーマン、非正規職、無職、その他）を0、専門・管理職（個人経営・自営業、管理職サラリーマン、専門職）を「1」と置き換えてダミー変数を作成した。以上の親の学歴・職業の再コード化はサンプル数のバランスを斟酌して行った。「英語学習歴」は学校外での英語学習期間（年単位）、「英語学習行動」は現在の大学以外での英語学習時間（1日あたり）を用いた。

要因変数の因子分析 「価値観」、「英語関連意見」（以下【意見】と略記）、「英語学習動機」（以下【動機】と略記）は、調査票においてそれぞれ多数の小問で構成されていたため、要約のために下記の通り日韓別に因子分析を行った（全て主因子法・バリマックス回転）。抽出因子数は固有値

表3【価値観】の因子分析(日本)

| | 自己実現志向 | キャリア志向 | 共通性 |
|-----------------|--------|--------|------|
| 能力を活かすこと | .792 | .106 | .639 |
| 自分の興味や関心を追求すること | .708 | .053 | .505 |
| 能力を高く評価されること | .682 | .307 | .559 |
| 出世して高い地位を得ること | .124 | .908 | .841 |
| 将来、一流企業に入ること | .177 | .837 | .732 |
| 固有値 | 2.229 | 1.046 | |
| 累積寄与率(%) | 44.585 | 65.501 | |

表4【価値観】の因子分析(韓国)

| | 自己実現志向 | キャリア志向 | 共通性 |
|-----------------|--------|--------|------|
| 能力を活かすこと | .894 | .164 | .826 |
| 能力を高く評価されること | .705 | .178 | .528 |
| 自分の興味や関心を追求すること | .614 | -.114 | .390 |
| 出世して高い地位を得ること | .149 | .909 | .849 |
| 将来、一流企業に入ること | -.004 | .630 | .397 |
| 固有値 | 1.886 | 1.106 | |
| 累積寄与率(%) | 37.721 | 59.833 | |

や解釈の容易さから決定した。また因子抽出後の共通性が0.3未満の項目は除外した。

【価値観】は日韓で同様の2因子を抽出した（表3・表4）。【意見】は日韓ともに3因子を抽出し、日本の第1因子・第2因子（〈英語促進〉・〈英米好感〉）はそれぞれ韓国の第3因子・第1因子にほぼ該当するが、日本の第3因子は因子負荷量の高い項目から判断して英語そのものの学習に対する積極性を表すと解釈して〈英語熱〉、韓国の第2因子は英語というよりもむしろ英米の社会や文化への同化志向を表すと考えて〈英米同化〉と命名した（表5・表6）。【動機】は日韓で第1・第2因子が入れ替わっているものの内容上ほぼ対応する2因子を抽出した（表7・

表 8)。

パス解析 因果モデル
に従って選定した項目を投入し、日韓別でパス解析を行った。重回帰分析はステップワイズ法を用いた。結果を図 5・図 6 に示す⁴⁾。数値は標準偏回帰係数である。

本稿の関心は英語学習行動に影響を与える要因を探ることにあるので、以下、英語学習行動の指標としている現在の学習時間に関係するパスを中心に検討していくことにする。

日本サンプルにおいては、学習時間への直接パスは自己実現志向（価値観）とキャリア獲得（動機）の 2 つであった。このうち後者へは 4 つの要因から直接パスが確認できる。最も“遡及的”なパスは、母学歴から英語熱（意見）・キャリア獲得（動機）を経て到達するパスである。母親が 4 大卒以上であると英語学習に熱心になりやすく、さらに将来のキャリアのために英語を学習しようとする動機づけが強くなり、実際の学習時間も長くなる、ということだ。次に、美術・博物館同伴（文化資本）から英語促進（意見）・キャリア獲得（動機）を経て到達するパスである。文化資本の高さが英語学習に関して促進的な意見を導き、それがキャリア獲得動機を強化して学習時間の長さにつながっている。また、キャリア獲得動機には学習歴とキャリア志向（価値観）からも直接パスおよび英語促進（意見）を介した間接パスが及んでいる。

一方、韓国サンプルにおいては、学習時間にはキャリア志向（価値観）と英米同化（意見）から直接パスが達している。また、前者から後者を介した間接パスも確認できる。注目すべきは、文化資本の 2 要因が学習時間に対して負の間接効果を与えていることである。すなわち、実家書

表5 【英語関連意見】の因子分析(日本)

| | 英語促進 | 英米好感 | 英語熱 | 共通性 |
|---------------------------------|--------|--------|--------|------|
| 日本では小学校でも英語を学んでいるが、いいことだ | .847 | .138 | .016 | .736 |
| 小学校のめつと低学年から英語を教えるべきだ | .822 | .143 | -.010 | .697 |
| 幼稚園、小学校のうちから海外留学することは、いいことだ | .623 | .122 | .193 | .440 |
| 英語を第二公用語にしたほうがいい | .505 | .088 | .219 | .311 |
| 大学入学時に英語力が要求されるが、いいことだ | .498 | .122 | .401 | .423 |
| 就職時にも英語力が要求されることがあるが、いいことだ | .469 | .102 | .461 | .443 |
| アメリカ合衆国の一般の人たちに対して、好感を持っている | .137 | .849 | .150 | .762 |
| イギリスの文化に対して、好感を持っている | .053 | .807 | .118 | .668 |
| アメリカ合衆国の文化に対して、好感を持っている | .088 | .796 | .178 | .673 |
| イギリスの一般の人たちに対して、好感を持っている | .181 | .777 | .085 | .644 |
| アメリカ合衆国の文化が世界中に広まっているが、いいことだ | .303 | .515 | .151 | .380 |
| 英語を勉強するのはとても楽しい | .094 | .110 | .904 | .839 |
| 仮に英語を勉強しなくてもいいのなら、勉強したくない | .061 | -.071 | -.714 | .518 |
| 英語を勉強することは、入学試験や就職活動に関係なくでも大切だ | .340 | .201 | .514 | .420 |
| 英語を上達させて、英語を母語とする人と友達になりたい | .324 | .203 | .487 | .383 |
| 英語を上達させて、アメリカ合衆国の社会の一員として、生活したい | .380 | .193 | .447 | .381 |
| 英語を上達させて、イギリスの社会の一員として、生活したい | .390 | .232 | .411 | .374 |
| 固有値 | 5.666 | 1.937 | 1.490 | |
| 累積寄与率(%) | 33.327 | 44.719 | 53.486 | |

表6 【英語関連意見】の因子分析(韓国)

| | 英米好感 | 英米同化 | 英語促進 | 共通性 |
|---------------------------------|--------|-------|--------|------|
| イギリスの文化に対して、好感を持っている | .881 | .186 | .095 | .819 |
| イギリスの一般の人たちに対して、好感を持っている | .875 | .222 | .050 | .817 |
| アメリカ合衆国の一般の人たちに対して、好感を持っている | .828 | .273 | -.010 | .760 |
| アメリカ合衆国の文化に対して、好感を持っている | .781 | .277 | .106 | .698 |
| 英語を上達させて、アメリカ合衆国の社会の一員として、生活したい | .264 | .889 | .079 | .866 |
| 英語を上達させて、イギリスの社会の一員として、生活したい | .300 | .815 | .138 | .774 |
| 英語を第二公用語にしたほうがいい | .132 | .603 | .216 | .427 |
| アメリカ合衆国の文化が世界中に広まっているが、いいことだ | .356 | .535 | .049 | .415 |
| 大学入学時に英語力が要求されるが、いいことだ | .048 | -.020 | .766 | .590 |
| 日本では小学校でも英語を学んでいるが、いいことだ | .028 | .124 | .707 | .515 |
| 就職時にも英語力が要求されることがあるが、いいことだ | -.001 | .045 | .594 | .355 |
| 小学校のめつと低学年から英語を教えるべきだ | .097 | .293 | .564 | .413 |
| 幼稚園、小学校のうちから海外留学することは、いいことだ | .349 | .281 | .394 | .355 |
| 固有値 | 4.909 | 1.811 | 1.086 | |
| 累積寄与率(%) | 37.761 | 51.69 | 60.044 | |

表7 【英語学習動機】の因子分析(日本)

| | 情報享受 | キャリア獲得 | 共通性 |
|----------------------|--------|--------|------|
| 英字新聞・雑誌等を読みたいため | .723 | .155 | .546 |
| 洋書等を読みたいため | .706 | .126 | .514 |
| 洋画等を字幕なしで見たいから | .691 | .165 | .505 |
| 世界中の情報を素早く取り入れるため | .677 | .172 | .489 |
| 世界の様々な文化に触れるため | .665 | .328 | .550 |
| 日本のことを世界に知らしめるため | .636 | .293 | .490 |
| イギリスの文化や社会情勢に興味があるから | .627 | .380 | .538 |
| 世界中の人々と意思疎通できるため | .623 | .362 | .519 |
| アメリカの文化や社会情勢に興味があるから | .557 | .302 | .401 |
| 外資系企業に勤めたいため | .208 | .844 | .755 |
| 将来海外赴任したいため | .181 | .829 | .720 |
| 将来英語圏の国に移住したいため | .226 | .766 | .637 |
| 語学留学のため | .228 | .661 | .488 |
| 学位取得のための留学のため | .235 | .518 | .323 |
| 将来仕事で使いたいため | .321 | .450 | .305 |
| 固有値 | 6.298 | 1.484 | |
| 累積寄与率(%) | 41.987 | 51.878 | |

籍数から英米同化（意見）には負の直接パスが及び、美術・博物館同伴から正の直接パスを受けた自己実現志向（価値観）から英米同化（意見）にも負の直接パスが伸びている。このうち後者については、同じ価値観因子でもキャリア志向は英米同化（意見）に正の効果を与えていて対照的で興味深い。

表8 【英語学習動機】の因子分析（韓国）

| | キャリア獲得 | 情報享受 | 共通性 |
|----------------------|--------|--------|-------|
| 将来英語を教えたいため | .748 | .073 | 0.565 |
| 外資系企業に勤めたいため | .744 | .158 | 0.579 |
| 将来海外赴任したいため | .740 | .155 | 0.571 |
| 将来英語圏の国に移住したいため | .704 | .163 | 0.522 |
| 学位取得のための留学のため | .663 | .011 | 0.439 |
| 将来仕事で使いたいため | .659 | .211 | 0.479 |
| 語学留学のため | .595 | -.043 | 0.356 |
| 専門分野の研究等で必要のため | .594 | .202 | 0.394 |
| 洋画等を字幕なしで見たいから | .118 | .700 | 0.504 |
| 英字新聞・雑誌等を読みたいため | .332 | .636 | 0.515 |
| 洋書等を読みたいため | .266 | .634 | 0.473 |
| 世界の様々な文化に触れるため | -.090 | .622 | 0.395 |
| アメリカの文化や社会情勢に興味があるから | .452 | .610 | 0.577 |
| イギリスの文化や社会情勢に興味があるから | .373 | .595 | 0.493 |
| 世界中の情報を素早く取り入れるため | .075 | .559 | 0.318 |
| 世界中の人々と意思疎通できるため | -.093 | .550 | 0.311 |
| 固有値 | 5.38 | 2.112 | |
| 累積寄与率(%) | 33.624 | 46.824 | |

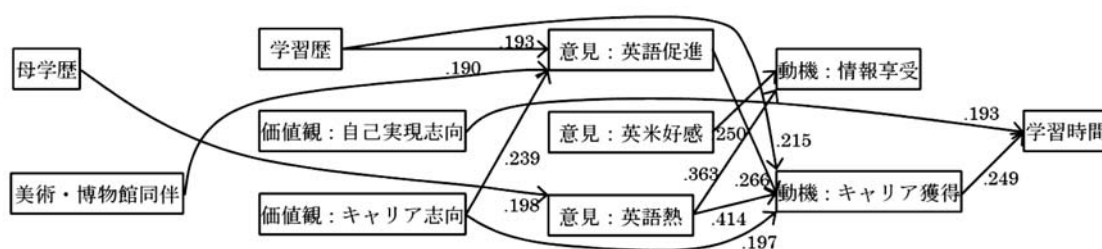


図5 英語学習行動の規定要因のパス・ダイアグラム（日本サンプル）

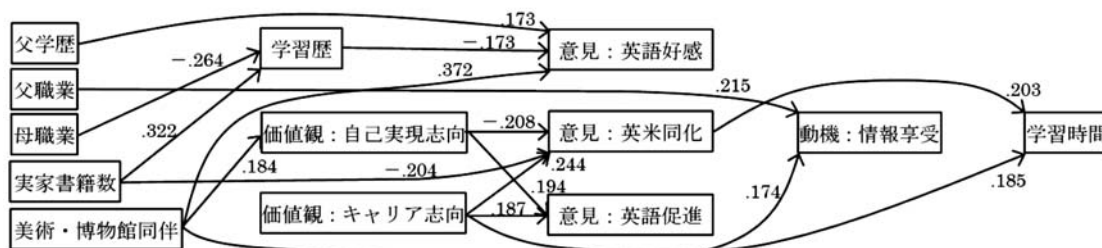


図6 英語学習行動の規定要因のパス・ダイアグラム（韓国サンプル）

4. まとめと考察

以上、まず単純集計から、韓国人学生は日本人学生と比べて学校以外での平均英語学習年数が3年ほど長く、また英語学習に強い動機づけを持っているなど、全般的に学習意識・意欲が高いことが分かった。

またパス解析においては、日本サンプルでは、学習時間を左右する要因として、価値観としてのキャリア志向・学習動機としてのキャリア獲得という将来のキャリアを見据えた要素と、さしあたりキャリアとは無関係な自己実現志向が混在しており⁵⁾、また間接的とはいえ文化資本が学習時間に正の効果を与えているのに対し、韓国サンプルでは、自己実現志向は学習時間に対して間接的にマイナスに作用し、キャリア志向の価値観が直接・間接にプラスに働いていた。さらに、文化資本が英米同化因子（意見）を介して学習時間に負の影響を与えているのは、逆に言えば文化資本の低い層ほど英米文化に同調的で、そのことがこの層の学習時間を伸長させている、ということでもある。

日本において学習時間を促進する異質の要因が混在している背景には、日本社会での英語の効用や位置づけが不明瞭であることが一つの理由として挙げられるだろう。それゆえ日本の大学生は、方向性が定まらないまま英語学習を行っていると推測される。一方の韓国では、社会におい

て英語が発揮する効用が明確であるため、学生自身も、大学の授業で英語を学んでいる場合でも、その目的や意義を自身で十分に理解した上で学習に取り組んでいるのであろう。これについては、現代韓国の社会事情も教育熱に大きな関連があるだろう。韓国中央日報電子版によると、「韓国は 25-34 歳の青年層の大学教育履修率が 2011 年基準で 64%と、経済協力開発機構（OECD）加盟 34 カ国で最も高い」が、大卒者の 4 割は就職できないという。このような状況の中、韓国人は学生時代に、就職で少しでも有利になるよう「スペック」の積み上げに邁進する。なお「スペック」は、「求職者の学歴、学点、TOEIC スコアなどをまとめて指す言葉」として韓国の国立国語院が 2004 年に新語認定を行っている。

このような教育熱を高める社会的背景に加え、韓国社会には人々の英語に対する意識を高める要因がいくつか存在する。その一つに韓国の経済体制が挙げられる。同国経済の特徴の一つが「外需」であり、サムスンや LG をはじめとする韓国の一流企業は世界市場をターゲットとしている。こういった企業は、国際経験豊かなグローバル人材を積極的に採用している。その選抜の一つの指標として英語試験の点数が非常に重視されており、就職試験でサムスンを受ける場合、TOEIC の最低ラインは 900 点とも言われている。

そして、ここに韓国政府の主導による英語教育政策の影響も加わると考えられる。1997 年末に韓国はアジア通貨危機の打撃を受け、IMF（国際通貨基金）の管理下に置かれた。これにより韓国政府の危機意識は一挙に高まり、国際競争力の向上を図る教育政策を急速に推し進めて行った。小学校 3 年生以上で週 2 時間、すべての学校での英語教育が義務づけられたのは、第 7 次教育課程においてであるが、これは 1997 年末に公示（2000 年実施）されている。

以上のように、韓国を取り巻く英語事情の背景には、同国社会における教育熱に加え、経済的・政治的要因が大きな影響を与えていると考えられる。韓国では英語の出来・不出来が死活問題であり、人々の人生を大きく左右する指標となっているのである。

翻って我が国では、例えば就職時に英語試験（主に TOEIC）の点数が重視される傾向になりつつあると言われているが、実際は就職試験においてそこまで大きなウェイトを占めるわけではない。英語能力は今日の日本企業では必ずしもなくてはならない、というわけではないのだ。職種にもよるが、現時点では英語が出来なくても生きていける社会なのである。

しばしば TOEIC や TOEFL 等の国別平均点を引き合いに出して「日本人は世界で最も英語が出来ない」と自虐的に言う風潮があるが、これは日本人が英語に向いていない、あるいは能力自体が低いからというわけではないだろう。日本社会における英語の効用や重要性が明確でなく、人々はさしあたり必要に迫られていないがために、英語を勉強しないのである。今後仮に、日本が現在の韓国のような社会・経済体制になった場合、日本人の「英語力」が飛躍的に伸びる日がやってくるかもしれない。

〔注〕

- 1) 本稿は筆頭著者が 2015 年 1 月に奈良女子大学文学部に提出した卒業論文に大幅な変更を加えたものである。

- 2) ただし、韓国の K 女子大学では英語講義（英語の 4 技能自体を学ぶ科目、英語で学ぶ科目の両方を含める）が多く開講されており、2013 年春学期の全体の開講科目数 3017 科目のうち、英語講義は必修科目も含め 526 にものぼる。一方、日本の J 女子大学では、2013 年前期の総開講科目数は 1,641 ある中、英語講義は必修科目を含めて 15 科目にとどまっている。このことから、韓国人学生は大学以外での英語学習時間は少ないが、大学の授業で J 女子大学の学生以上に英語講義を受講しており、英語の総学習時間数では J 女子大学のそれを上回る可能性が十分にあり得るということに留意しておきたい。
- 3) 質問紙には 38 の小問を設けたが、本稿では日韓の差異に着目する観点から、両国で平均値に有意差のあった項目のみ示している。
- 4) 有意な効果のみ記載。誤差変数は省略。
- 5) この結果については女子大学生というサンプルのバイアスも考えられる。寺沢（2015）は、日本版総合的社会調査（JGSS）の結果から、高等教育卒の若年女性において友人知人との交際や趣味・旅行等のために英語を使う度合がとりわけ高いことを見出している。

<参考文献>

- 中央日報（2014）「大学進学率 OECD 1 位なのに…大卒者の 4 割は就職できず＝韓国」韓国中央日報日本語版、（2016 年 1 月 16 日取得、<http://japanese.joins.com/article/562/182562.html>）。
- 長谷川由美・吉田佳代（2011）「日本と韓国における大学生の英語学習意識・動機の比較研究」、『アジア英語研究』13、pp. 21-37。
- 樋口謙一郎（2010）「韓国の英語教育政策——現状と展望（上）『教育課程』の改訂とその背景」、『英語教育』59-4、pp. 66-68。
- 松本麻人（2007）「韓国社会における英語熱と学校教育」、『BERD』8、pp. 36-41。
- 文部科学省（2002）「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」文部科学省ホームページ、（2016 年 1 月 16 日取得、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/04042301/011/002.htm）。
- 大阪市立大学教育研究センター・大阪府立大学総合教育研究機構（2007）『今後の初年次教育の在り方に関する調査研究 文部科学省 先導的・大学改革推進委託事業（平成 18 年度）報告書』。
- 佐藤夏子（2009）「韓国と日本の大学生の英語学習動機と学習行動」、『日本実用英語学会論叢』15、pp. 13-20。
- 寺沢拓敬（2015）『「日本人と英語」の社会学——なぜ英語教育論は誤解だらけなのか』研究社、2015。
- 吉川寛（2003）「日本と韓国の大学生における英語への認識の比較」、『JACET 中部支部紀要』1、pp. 51-65。